

平成29年度第6回 古賀市上下水道事業経営等審議会 会議録（要点筆記）

日時：平成29年9月22日（金） 9：30～10：51

場所：市役所 第2庁舎3階 302会議室

○会議及び会議録公開の取扱いについて

会議及び会議録について、これまで同様公開とする。会議録は、要点筆記とし、できるだけ簡潔にまとめて作成することとする。作成後は、委員の承認を得て公開する。

○古賀市水道事業の概要について（説明）

- (1) 事業概要について
- (2) 財政状況について
- (3) 経営分析について

<質疑応答>

(委 員) 現在古賀市の約50%が給水区域となっているが、第10期拡張事業以外に今後拡張の予定はあるのか。また、将来投資はさらに増えるのか。

(事務局) 資料の緑色の部分が現在拡張を行っている区域である。現在のところそのあとの具体的な予定はない。今後の投資については増えていく見通しである。図の右側は山手の地域だが、その水質等にもよってくるものと考えている。

(委 員) 給水区域外の住民から拡張の要望はあっていないか。山手に拡張すると投資費用は大きくなると理解してよいのか。

(事務局) 山手のほうは井戸水が比較的採れて水質が良いと聞いており、相談等はあるが要望まではない状況。今後水質について心配されたり相談等があったりした場合は個別に対応していく。投資費用についてはお見込みのとおり。

(委 員) 有収水量の割合について、古賀市は全国平均よりも高いようだが、その要因は。

(事務局) 古賀市は漏水による水量が少ないことで有収水量の割合が高いのではないかと予想している。

(委 員) 受水について、古賀市が受水を行っているのには、どのような理由があるのか。また、古賀市に余裕がある場合も水量を減らすことはできないのか。

(事務局) 福岡都市圏は1級河川を持たず、水不足が起きやすい風土であるため、過去2回の渇水を契機に筑後川から水を引くことになり、その振り分けの際に協定を結んだ経緯がある。現在は余裕の有無にかかわらず協定の水量を受水することになっている。

(委 員) 北九州市からの受水についても同様の協定を結んでいるのか。

(事務局) 北九州市については、渇水に備え福岡都市圏に水を融通するため導水管を布設したが、管内

の水質を維持するためには水を流し続けたいといけなため、中間に位置する宗像地区事務組合、古賀市及び新宮町で維持用水を受水する協定を結んでいる。

(委 員) 当時その業務に携わっていたのだが、もともと災害対応のため相互融通を行う目的で北福導水ができた経緯がある。福岡地区水道企業団のほうも、ダム等の水源開発で割り当てが増えるときにその分を都市圏の各自治体に割り当てている。そのため大山ダム、海水淡水化センター、現在建設中の五ヶ山ダムと水源が増えるたびに受水量の割り当てが増えてきているという経緯がある。

(委 員) 水の単価は受水と自己浄水とでどちらが安いのか。

(事務局) たくさん水を作ったほうが水量あたりの経費が抑えられるため、受水のほうが安い。

(委 員) 買ったほうが安いということだが、施設規模の縮小の検討はしているか。

(事務局) 今ある施設を崩して新規に縮小して建てることは考えていないが、動かす系統数を減らしたり、減らした系統のメンテナンスをするかどうかというのは検討したりして、本当に必要な分だけに投資を行っているところである。

(委 員) 受水した水はいったん浄水場に集まって、そこから各家庭に配水するのか。

(事務局) 自己浄水、受水ともに配水池にいったん集まり、ご家庭に配水している。

(委 員) その月の受水量の増減によって世帯の水道料金が変動するようなことはないか。

(事務局) その月の受水費の増減で使用者が納付する水道料金が増減するということはない。

(委 員) 独立採算で赤字にはなっていないので、少しずつプールはされているのか。

(事務局) これまでの40年・50年の営業活動の結果積みあがったものが利益剰余金にあたる。単年度赤字の場合は減ったりもするが、通常は収益を見ながら費用を勘案し、黒字になるような予算を組んでいる。

(委 員) 諮問書に、今後の「経営基盤の強化を図るため」に検討をしてほしいとあるが、財務状況を見ると水道会計は非常に健全な経営であるよう思う。将来どういったリスクや課題があるのか。

(事務局) 課題等について、具体的には次回説明するが、配水管布設替えについて、今後投資額の大幅な増加が見込まれており不安を抱えている。また、料金の体系が20年変わっておらず、その間に人口減少、世帯当たりの人数の減少、一人当たりの使用水量の減少等、環境の変化が起きている。これらに対応した料金体系に見直したときに経営にはどういった影響を与えるのかというところは検討課題になってくると考えている。

(委 員) 経年管というのは更新時期を迎えた管ということか。また、経年管比率は数字が低いほうがよいのか。

(事務局) お見込みのとおり。経年管比率の平均が10%で、古賀市は16%なので、平均よりは少し多くなっている。実質的な使用年数で見れば10%前後である。

(委 員) 最大供給能力や実際の配水量、稼働率をみると余力がかなりあるようだが、融通しあうために余裕を持っているということか。

(事務局) 古賀市の計画水量は少し前までは約2万立方メートルで、その計画に合わせるために2万立

方メートルの能力を持っているが、近年、計画水量を1万6600立方メートルに見直したことでそのようになっている。ただし、最近では井戸水が採りにくくなったり、天候のブレが大きくなりつつあったりしているので、必ずしも採れるとは限らないのが実情である。

(委員) 給水区域内で井戸を併用している件数は増えているのか。

(事務局) 水道課では井戸使用の件数は把握していない。次回までに下水道課に確認する。

○今後のスケジュールについて

第7回会議は、10月23日(月)9時30分から、第8回会議は、11月20日(月)9時30分からの開催を予定。

○その他連絡事項

第7回目以降の会議資料については、事前に送付する。

第6回の出席委員への報酬等は10月11日までに支払いを予定している。